

序 文

これまで医歯薬出版から、「バスキュラーアクセス超音波テキスト」と「実践シャントエコー」の2冊のテキストを出版させていただいた。これらのテキストは、主に検査室において、医師や臨床検査技師が使用するエコーを念頭におき、編集・執筆した。しかしその後、この数年で、透析施設においてバスキュラーアクセスのエコー検査が急速に普及してきた。その担い手となっているのは、臨床工学技士や看護師などの透析スタッフである。

透析スタッフは、臨床検査技師とは違った視点、すなわち穿刺する対象としてシャントをとらえている。穿刺困難、脱血不良あるいはシャント閉塞はまさしくその日に血液透析が行えるかどうかにかかわる問題であり、より切迫した場面でエコーを必要としている。そのような状況で、どのようにシャントエコーを使用していくか、その具体的な方法については今までのテキストでは十分に記載することができず、新たなテキストの編集を模索していた。

本書は、透析スタッフが透析施設で使用するエコーを主眼として編集した。シャントの解剖や基本的なプローブの走査法、また機能評価・形態評価についての手技や考え方について解説していただいた。特に、穿刺におけるエコーの使用法については、穿刺前の血管の確認から、エコーガイド下穿刺、穿刺後の針の修復などを詳細に記載していただいた。

透析スタッフのなかには、今までプローブをもつたことのない方もいるであろう。まずは本書で、基本的な考え方や技術を習得してほしい。ただ、どれほどテキストで勉強しても、エコーの技術は上達しない。プローブを微調整し、脳と手の動きを連動させなければならない。そういう意味では、エコーは自転車と似ている。一度自転車に乗れるようになったら一生乗ることができるように、エコーも一度その技術を身につければ、一生大きな武器となる。本書で基本を身につけたら、さっそくプローブをもつこと、そこから出発してもらいたい。最初は戸惑うかもしれないが、エコーは試行錯誤することでしかマスターしない。

視診・触診・聴診だけでは伝えきれなかった所見も、エコーを用いてシャントをマッピングすることで正しく伝わり、情報共有が可能となる。透析施設におけるスタッフ間の連携、さらに透析施設間での連携として、今後エコーの情報はさらに有用となってくるであろう。それぞれの施設で、エコーを核としたシャント管理法を構築してほしい。

本書の出版に際し、忙しい臨床の場で活躍されながら執筆していただいた先生方に、この場を借りて心よりお礼を申し上げる。また、編集作業をはじめとして多大なる協力をいただいた医歯薬出版のスタッフの皆様に深謝する。

シャントは血液透析のアキレス腱ともいわれるが、患者さんにとっては命綱といつてもよい。本書を通して、多くの透析スタッフにエコーをマスターしてもらいたい。そして、一人でも多くの患者さんのシャントが救われ、安心して血液透析が受けられることを願っている。

2017年 5月

春口洋昭